

“輕聲”の一側面

樋 口 靖

1.

聲調言語というものをどんなに狭く定義しようとも、中國語が代表的な聲調言語のひとつであることには疑いがない。定義をあまり廣くとすると英語のような言語も聲調言語の一種に含まれてしまう。たとえば、/No/ と /No?/ では、明らかに pitch contour の對立が見られるし、/permít/ と /pérmit/ のようなペアについてみると、一般に、stress をもつ音節と高音調との間には共起關係が存在する。つまり、音聲連續における pitch の變動あるいは不變動という意味での intonation を用いる言語がそのまま聲調言語であるということになれば、世界中のほとんどの言語は聲調言語であるということになりかねない。そこで、Kenneth L. Pike は、聲調言語を

a language having lexically significant, contrastive, but relative pitch
on each syllable^[注1]

と定義している。この定義によれば、英語のような言語は聲調言語のクラスから排除される。というのも、聲調言語における pitch は、significant であると同時に lexical であることをも要求されるからである。

この定義を、また、生成文法的な立場から解釋すると、ある音調的事象があるとして、その事象を規則的に豫測することができず、従つて、lexicon 内部においてそれぞれの morpheme に、その調型を個別に書きいれておくことがどうしても必要であるようなタイプの言語のみが、聲調言語に屬する、というようなことにならうか。/permít/ v. s. /pérmit/ という對立を考えてみても、動詞と名詞という文法範疇からの情報によつて、その stress の位置を豫測することができ、それに伴つて餘剩的に音調の型をも豫測することが可能である。このような型の言語をも聲調言語と呼ぶのでなければ、英語を聲調言語の一種と考えるには、どうしても無理がある。

日本語は普通、pitch アクセントを持つ言語であると言われることが多い。たとえば、/hási/（箸）と /hasi/（橋）の対立は、前者が高低型、後者が低高型の pitch contour を持っている。しかし、日本語におけるこのような pitch contour は、それぞれの語句の“アクセント核”の位置さえ分れば、豫測可能であることが明らかになっている。言いかえれば、日本語では、lexicon の中で morpheme に與えられているのは [high] とか [low] のような pitch 素性ではなく、たとえば /bo⁷ku/（僕）のように、より抽象的な“accent”であつて、この“accent”の位置を示せば、それにある種の規則を適用することにより、その語の音聲學的な pitch contour をすべて實現することができるので^{〔注2〕}ある。そうだとするならば、見かけ上、pitch の面である種の型を有するにもかかわらず、日本語が聲調言語の一種であるときめてかかるのは問題があることになる。

中國語の pitch contour が日本語や英語のそれと大きく異なる點はもはや明らかであろう。中國語においては、一般に、その morpheme の持つ pitch の型を豫測することはできない。従つて、その lexicon 内で必ずその pitch の型を指定しておかねばならない。たとえば、/dǎ/（打）と /dà/（大）では、前者が三聲という聲調を受け、後者が四聲という聲調を受けるという具合に指定されるはずである。つまり、lexical entry における音節はその有聲部分の pitch が明記されているはずなのである。

2.

中國語の聲調についての underlying form を設定しようと試みた際に、私はいわゆる“輕聲”をどのように扱ふべきかという問題を避けて考へていた。^{〔注3〕}それというのも、輕聲という“聲調”が一律に lexicon 内部で豫め與えられると簡単に考えることにためらいを感じていたからである。

中國語の聲調のもつ性格を檢討する場合、輕聲の音節は stress を受けない、という説明がしばしばなされるようである。たとえば、

In weak stress, the tone range is flattened to practically zero and the duration is relatively short.…… Becase the tone is flattened to zero, I have called it the neutral tone.^{〔注4〕}

と、趙元任は述べている。

しかし、ここにひとつの疑問が起きて来る。すなわち、ある音節が輕聲という“聲調”を持つということは、その音節が[-stress]であるということから常に予測できる事実なのであろうか。それとも、ある音節の[-stress]という性質が、その音節が輕聲という類の“聲調”を與えられているということから予測可能な事実なのであろうか。このような議論をすると、いかにも鶏が先か卵が先かと言った水かけ論めいて来るが、言わんとすることはそうではなく、中國語において、[tone]と[stress]とは、それぞれ別の素性であると考えるべきか否か、ということである。その場合に、輕聲音節はstressを受けている音節に較べてその繼續時間が短く、先行するstressのある音節の調型によつて、そのpitchが決定されることが多いと思われるために、問題がさらに複雑化するであろう。

議論を單純化するために、次のような例を考えてみよう。たとえば、

(1) /dā ta/ (打他)^{〔注5〕}

一般に、動賓関係にある句は

(2) /chī fàn/ (吃飯)

のようなstress patternを取るが、賓語が人稱代名詞である場合には、第一音節がstressを受けて、本來の基本四聲調のうちのひとつの聲調で發音されるのに對し、人稱代名詞の部分はいわゆる輕聲となり、stressを受けずに短かく發音されることが多い。

ここで、かりに[+輕聲]という素性を設定し、一聲、二聲、三聲、四聲の基本四聲調を表わすその他の聲調素性とと同じく、これもまた聲調素性の一種であると假定してみよう。そして、(1)のような例において、後の音節がstressを受けないという事實は、どうすれば予測できるかを考えてみることにしよう。

上の假定によれば、輕聲は他の聲調と同じく、聲調の一種なのであるから、/tā/が一聲としてlexiconの中に登録されているのとは別に、[+輕聲]な

る指定をされた /ta/ もまた lexicon の中に記載されていると考えれば、格別問題は無いのかも知れない。こうしておけば、

(3) [+輕聲] → [-stress]

という餘剩規則によつて、後の音節が stress を持たないということを指定できるであろう。つまり、(1)の人稱代名詞に當る音節の -stress 性は(3)によつて餘剩的に豫測することができるのである。

このように、ある人稱代名詞について lexicon の中に二つの書込みがあるということ、すなわち、ひとつは [+輕聲] という素性をもつ人稱代名詞 /ta/ があり、もうひとつは、[+輕聲] という素性をもたない人稱代名詞 /tā/ があるということは、何を意味するのであろうか。一體、輕聲の /ta/ と個有の聲調をもつ /tā/ とは全く無關係なのであろうか。上述のような議論を容認すれば、それはその通りである。そしてその場合、双方の音聲形式上の類似は完全に偶然のものにすぎないと考えざるを得ない。従つて、賓語の位置に置かれた人稱代名詞は輕聲化する、などという言い方は極めて不正確なものだということになる。なぜなら、“輕聲化”という言い方をすれば、それが輕聲以外のものから派生して來たものであるということ、その途端に暗示してしまうからである。

實際のところは、(1)の第一の要素と第二の要素の動賓關係という統語關係によつて、その結果として、後者が輕聲となるという見解は、正當なる言語的直觀として無視できないように思われる。だとすれば、この見解は何らかの手だてで、文法の記述に反映されねばならないであろう。上述のような處理をすれば、lexicon の構造をいたずらに複雑なものにしてしまうという理由を別にしても、その支持しがたいことの動機は存在するのである。

さらにもうひとつ別の方法が考えられる。それは、[+輕聲]なる素性を /tā/ という音節に配當するなんらかの規則が存在すると想定してみるのである。この考え方によると、たとえば、“動詞の後が人稱代名詞ならば”，という条件のもとで、

(4) S → [^[注7]+輕聲]

という規則が働いて、tā を ta とし、しかるのち、規則(3)が起動して[-stress] となり、さらに [-stress] という環境のもとで、その音節の音聲學的な pitch が [low] であるか、[high] であるか、あるいは [mid] であるかというように指定されるかも知れない。また、規則(3)を設定せず、規則(4)を適用したあとで pitch の値を表記する規則を立てて、音聲學的な pitch contour を指定することも可能であるが、その場合には規則(4)は stress についての音韻規則を設定せずに [+輕聲] という条件のもとで pitch 實現化規則が働くことになろう。

どちらがより妥當であるかを判断するのは非常に難しいが、後者の場合には、[+輕聲] が音節の stress についてその値を確定することを妨碍する結果になつていることに注意せねばならない。

ようやく問題は明らかである。音節に直接に stress を指定する規則、たとえば、

(5) S → [-stress]

を想定して不都合ないかなる理由があるのだろうか。/kànkàn/ (看看) を例として、再度問い直してみよう。このような一連の動詞重疊形式は明らかに形態論的な派生の形式である。これらの第二音節はいわゆる“輕聲”であり、全體としてひとつの stress pattern を形成している。問題はすなわち

(i) この形式の後の /看/ は [+輕聲] としてマークされており、そこから言語の餘剩として [-stress] を豫測することができるのか。

(ii) それともある種の強勢規則によつて [-stress] を音節 /看/ に直接に配分する過程が存在するのか。

もし(ii)の見解が妥當だとするならば、いわゆる“輕聲”は stress pattern について關與的であつて、pitch に対しては redundant である可能性が大きい。この見解を支持する若干の根據を以下に提出してみようと思う。

3.1

中國語にある種の stress pattern が存在することはよく知られている。句あるいは語において、中間に pause がなく、通常の stress を受けた音節連続は、そのすべての音節が同程度の音聲學的な stress でもつて調音されるわけではなく、最後の音節が最強、最初の音節がそれにつき、中間の音節は弱を示す。^[注8]たとえば、

- (6) /xuexiao/ (学校)
(7) /daxuesheng/ (大学生)
(8) /renmingongshe/ (人民公社)

そして、これらの語は、そのすべての音節に [+stress] を含んでいると考えられる。

これらの語の stress pattern はどのように説明すればよいだろうか。一連の強勢規則によつて、その stress を指定するに先立つて、複合語を構成する各語は、主強勢規則の適用を受けていると假定せねばならない。すなわち、それぞれの語は主強勢規則によつて第一強勢が與えられるのである。また、各語には語境界を表わす記號 /#/ が與えられているはずである。^[注9]従つて、たとえば /xuexiao/ は、強勢規則の適用される以前には、

- (9) [# [# xue #] [# xiao #] #]

のような姿をしていると考えてよいであろうが、これに第一強勢を與える規則が適用されると、

- (10) [## xue ## xiao ##]

となる。ところで複合語のための強勢規則は次のようなものとなるであろう。

(11) S → [1 stress]/[X[_{1 stress}] Y]

条件：Y ≠ …[1 stress]…

これは、(10)の段階で第一強勢を有していた音節のうち最後の音節に新たに第一強勢を與えることを意味している。ところで、

when primary stress is placed in a certain position, then all other stress in the string under consideration at that point are automatically weakened by one.
[注10]

という規約によつて、第一音節は一段階だけ弱化される。従つて、(10)は規則(11)とこの規約の適用から、

(12) ## xue² ## xiao¹ ##

となる。この規則は、つまり主強勢規則によつてそれぞれの語、すなわちこの場合、音節は、第一強勢を與えられてはいても、この第一強勢がいかなる場合にも堅持されるものではなくて、その語がもつと大きな音韻的單位の中に組み入れられると、他の語との関連で、第一強勢が弱化する可能性があるということを示している。さらに(7)の例を考えてみよう。主強勢規則が適用された段階で、

(13) da¹ xue¹ sheng¹

規則(11)により

(14) da² xue² sheng¹

中間の音節の強勢をもう一段階引下げるために、次の規則を追加する。

(15) 2 stress → 3 stress/S——(S)*[1 stress]
[注11]

この規則によれば、第一強勢を持つ最後の音節と音節連続中の第一音節を除く

すべての音節は [3 stress] を與えられる。規則(15)の適用によつて (14) は、

(16) $\overset{2}{d\bar{a}}$ $\overset{3}{xue}$ $\overset{1}{sheng}$

となるであろう。念のために、例(8)では、

(17) ren min gong she

1 1 1 1 主強勢規則

2 2 2 1 規則(11)

2 3 3 1 規則(15)

となる。

複合語の stress pattern を規則化して指定しうる可能性を指摘したが、動詞句についての最も一般的な stress pattern も、簡単な規則で指定できることを以下に示してみよう。/wanfan/ (晚饭), /qiche/ (汽车) のような名詞は、前述の規則によつて、たとえば、

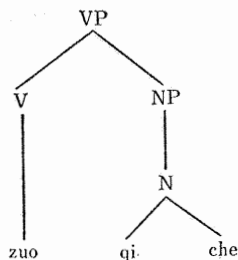
(18) $\overset{2}{q\bar{i}}$ $\overset{1}{che}$

21型の stress を有することが分つていると假定する。ところが、これが賓語となつて、たとえば /zuo qiche/ (坐汽车) の如くになると、その stress pattern は

(19) $\overset{2}{zuo}$ $\overset{3}{q\bar{i}}$ $\overset{1}{che}$

231 型となる。このような現象はいかなる過程によつて表現できるであろうか。注意せねばならないことは、この動詞句が表層構造で次のような統辭論的指標——統辭論的な情報を具えているはずだということである。

(20)



これを、名標付き括弧で示せば、

(21) [# [# zuo #]_V [# [# qi #] [# che #] #]_{NP} #]_{VP}

であり、つまり強勢規則適用以前の形で、ある主強勢を配分すると、第一段階、

(22) [## zuo¹ # [## qi¹ ## che¹ ##]_{NP} #]_{VP}

となり、これに規則(1)を適用して、第二段階、

(23) [## zuo¹ ### qi² ## che¹ ###]_{VP}

さらに(23)に、再度、規則(1)を適用して、第三段階、

(24) ## zuo² ### qi³ ## che¹ ###

231 型の stress pattern を派生することができる。

3.2

以上、複合語や句など、語より大きな言語単位の stress pattern を一連の強勢規則でもつて指定する可能性について、不完全とは言え、その具体例を挙げて考えてみた。しかし、語のレベルの stress は、前述のような一組の規則が適用される以前に指定されているはずである。しかも /pútao/ (葡萄) や /dōng-xi/ (東西) といった lexical な二音節語ではなく、何らかの統辭論的、形態論

的信息をもつて派生されると豫想できるような語のうち、比較的扱いやすいものに對して、考察を加えてみることにしよう。

たとえば、所有格を表わす marker の /de/ (的) は常に強勢をうけず、/wode jia/ (我的家) の /wode/ の stress pattern は、

(25) $\overset{1}{\text{wo}} \overset{0}{\text{de}}$

10型である。この境界記號は、

(26) ## wo # de ##

の如く與えられていると假定しよう。すなわち /de/ は語ではないので /wo/ と /de/ の境界は ## となつていないと考えてみるのである。従つて /wode/ という形式は一つの語と考えることができる。恐らく、/de/ はある種の形態論的な變形によつて導入されるのではないかと思う。^[注12](26)の条件下では、實質的には規則(1)は機能しない。なぜなら規則(1)は複合語あるいは句に適用される循環規則だからである。そこで、これが /wode jia/ (我的家) という句を形成した場合には、

(27) wo de jia

1 0 1

2 0 1

という pattern を指定することができる。201は規則(1)に依るのである。この場合、規則(1)が正しく 201型の stress を指定するためにはに /de/ に [-stress] 素性が含まれていなければならないことに注意してほしい。

ここで、先に挙げた動詞の重疊形式 /kankan/ (看看) の例を考えてみよう。これを名標付き括弧を用いて示すならば、

(28) [# kan # [# kan]v#]v

となるであろう。この場合、動詞が重疊された形で lexicon に記載されていると考えるのは無理であつて、何らかの統辭論的な過程でもつて派生されたと假定する必要がある。また、語段階の規則適用以前に、語境界の ## を消去する規則が存在する、と假定する。動詞重疊形式のための規則は

(29) 主動詞に第一強勢をおく。

そこで、

(30) kan kan
1 1
1 2 規則(29)

そして、次のような規則が期待されるであろう。

(31) S \longrightarrow [-stress] / [$\overline{\alpha$ stress]
条件 : $\alpha \neq 1$

これにより

(32) $\overset{1}{\text{kan}}$ $\overset{0}{\text{kan}}$

が派生される。

動詞重疊形式の派生過程で問題となるのは、變調規則との前後関係である。すなわち、變調規則は規則(31)の適用以前に適用されねばならない【注13】と思う。というのは、變調される音節の後の音節は [+stress] であること、つまり、少なくともその個有の調型を保持していることが要求されるであろうから。 /xiang-xiang/ (想想) を例にとろう。まず、

(3) xiǎngxiǎng → xiángxiǎng

という過程があり、その後に第二音節が弱化して[-stress]の指定を受け、さらにその pitch の価値が決定され则认为られる。

最後に、/dongxi/ (東西) のように lexical なものは、統辭構造からその stress pattern を豫想する方法はない。この類の lexical items の stress pattern は、たとえば

$$(4) S \longrightarrow [-\text{stress}] / \left(\begin{array}{c} \overline{-\text{high}} \\ -\text{low} \end{array} \right)$$

のような規則によつて表わすことができるかも知れない。

3.3

以上、粗略ではあつたが、中國語には stress pattern を決定するある種の強勢配分規則が存在するかも知れないということ、少くともその可能性を示すことだけはできたと思う。もちろん、ここでは思い着くままに、その場限りの例を考えてみたにすぎないので、上述のような規則化では全く不完全なものであることは言うまでもない。

ところで、これらの過程には [+輕聲] という素性は介入しない。つまり [+輕聲] を指定するような何らかの規則は存在しなくてもよいように思われる。というのも、それは直接に [-stress] と解釋されても支障がなかつたからである。また假りに、(3) のような過程を容認するならば、(6) の如き規則は [+stress] であることを全くその前提としている故に、[+輕聲] 以來のすべての音節に [+stress] を提定するための別の規則が要請されることになる。これに對し、音節に [-stress] を直接配當する規則を設定できれば、このような繁雜さを回避できるわけである。

4.

最後に、強勢配分規則の存在と、いわゆる“輕聲”のもつ性質との間における興味深い一つの例を提起しようと思う。

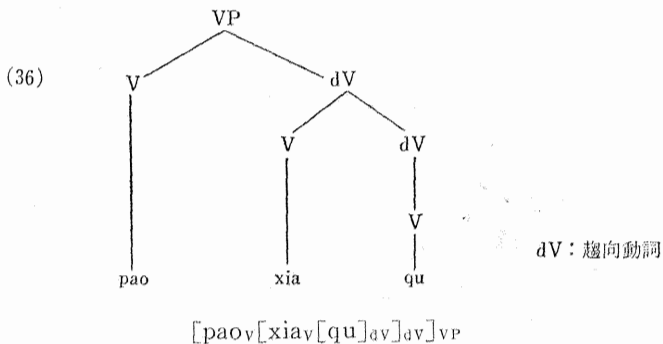
中國語の“來，去”が單獨では動作動詞として使用されることはいうまでも

ない。この二つの動詞はそれぞれ“進，出，上，下”等の他の動詞に付加されて，“进来，进去，出来，出去，上来，上去，下来，下去”のように、いわゆる趨向補語となることができる。單獨の動作動詞“来，去”はもちろん個有の聲調を持ち、かつ stress を受けているが、一旦趨向補語となる場合には、“輕聲”に轉化して、/jinlai/ や /jinqu/ となる。このグループが、“跑，走”などの動詞に付加された“走进来，走进去，走出来，走出去，走上来，走上去，走下来，走下去”の如き形式は、後の二音節がともに輕聲化して、/zǒujinlai/ のようになる。このような統辭構造の動詞句は、第一強勢が常に主動詞に置かれ、その他の音節は [-stress] に落され、従つて、個有の聲調を持たない“輕聲”として實現すると言える。輕聲音節の pitch はその音節に先行する stress を受けた音節の pitch contour いかんによつて決定されるとすれば、これらの動詞は lexicon 内においてもともと登録されていた pitch contour とは無關係に、そのつど異つた pitch でもつて實現する。たとえば、“来”は lexicon においては二聲（上昇調）として記載されているが、ひとたび趨向補語の位置に立つと、たとえば

㊦ chu ㄣ̄ lai ˧
 na ˧ lai ˧
 zou ˨ lai ˧
 kan ˨ lai ˧

もしこの種の動詞句に、直接 [-stress] を配分する過程が存在するとすれば、それはどのようなものであろうか。以下、試案を提出してみたいと思う。

大切なことは、これらの動詞句が統辭論的な派生過程を持つているという假定である。たとえば、/跑下去/ はこのままの形で lexicon に記載されているとは考えにくい。そこで、



この種の動詞句のために、次の強勢規則を用意する。

③7 規則 (29)

③8 規則 (31)

この二つの規則によつて、

③9	[pao ¹ [xia ¹ [qu ¹]]]	主強勢規則
	[pao ¹ [xia ¹ qu ²]]	規則 ③7
	[pao ¹ xia ² qu ³]	規則 ③7
	pao ¹ xia ⁰ qu ⁰	規則 ③8

のような展開を得ることができる。

5.

規則が ad hoc なものでしかないのは残念であるが、以上私は中國語には多分、一連の強勢規則が存在するのではないかという豫断から出發し、強勢規則によつて [-stress] を直接に配當することの可能性を論じ、いわゆる“輕聲”の少なくとも一部は、stress に關與的な性格を持つていであろうという憶測を述べてみた。本稿が問題提起および中間報告にしか過ぎないことは言を俟たない。諸賢の指教を仰ぐことができれば幸せこれにすぐるものはない。

- [注1] Pike, Kenneth L. (1948) *Tone Languages*. Ann Arbor : Univ. of Michigan Press. pg. 3
- [注2] この種の研究には、早田輝洋 (1966)『東京方言の音韻化規則』言語研究 No. 49, McCawley, J.D. (1968) *The Phonological Component of a Grammar of Japanese*. The Hague : Mouton. などがある。
- [注3] 拙稿 (1972)『中國語 (普通話) における若干の變調規則について』東京教育大學漢文學會會報 No. 31.
- [注4] Chao, Y.R. (1968) *A Grammar of Spoken Chinese*. Univ. of California Press. pp. 35—36
- [注5] 數字の 1, 2, 3. は第一, 二, 三強勢, 0 は stress を受けないことを表わす。
- [注6] 基本四聲調は、二つ以上の素性の matrix として表わされるので, [+輕聲] はそれらの素性よりももっと抽象的な素性 (たとえば四聲調全體とコントラストをなすような素性) であるかも知れないが, それは當面の議論には関係がない。
- [注7] S は音節。ここでは, tone や stress の prosodic features は音節に配當されると假定しておきたい。
- [注8] Chao, Y. R. (1968) 上掲書 pg. 35
- [注9] “語” word の概念と“境界記號” boundary symbol については, Chomsky, N. and M. Halle. (1968) *The Sound Pattern of English*. (SPE と略稱) New York : Harper and Row. pp. 366—370 参照
- [注10] SPE. pg. 35
- [注11] Z(X)*W は ZW, ZXW, ZXXW, ZXXXW, 等の縮約を示す。SPE pg. 344 参照
- [注12] この假定が全く正當であると主張しているわけではない。ただ, /晚饭/ における /晚/ と /飯/ との統合関係と, /我的/ における /我/ と /的/ との統合関係とでは, かなりその性格を異にするのではないかという直観にもとづいているだけのことで, 全く一個の假定にすぎず, 安定性を欠いていることは否めない。
- [注13] 一般に, 變調規則は強勢規則以後に適用されると予想される。